特集

スポーツが持つ〝多様な魅力〟がQOLを豊かにする

現代のスポーツは、政治、経済、教育、社会…さらに、「人類の未来」の姿まで考えさせてくれる

―現代社会におけるスポーツの意義と課題―

玉木 正之（たまき・まさゆき）

スポーツライター、音楽評論家、小説家、放送作家、1952年京都市生まれ。東京大学教養学部中退。大学在学中から新聞（東京新聞）で演劇・音楽・映画評やコラムなどを執筆。主な著書は、『スポーツ解体新書』（日本放送出版協会）、『ニッポンはどうすれば勝てるのか?』（アスペクト）など。

スポーツ立国を目指した試み

ロンドン・オリンピックが幕を閉じたあと、史上最多38個のメダルを獲得した日本選手たちは、3台のバスに分乗して東京銀座をパレードした。すると約50万人もの人々が沿道を埋め、選手たちに向かって笑顔で手を振り、歓声をあげ、大きな拍手を贈った。

これもまた、現代社会でスポーツが果たしている大きな役割の象徴的な出来事、といえる。国を代表するスポーツマンの活躍は、国民の心を明るくし、「心の健康」に寄与しているのだ。

ただしオリンピックを開催したイギリスでは、さらに大きな役割をスポーツに与えた。「心の健康」だけでなく、スポーツが国民の「身体の健康」にも具体的に影響を及ぼすよう、キャンペーンを開始したのだ。

イギリスのメダリストたちは、大会終了後にテレビやラジオ、さらにツイッターやフェイスブックを通じて、イギリス国民にスポーツへの積極的な参加（スポーツクラブへの加入）を呼びかけた。この運動はイギリス・オリンピック委員会（BOA）が中心になって仕掛けたものだが、モデルになったのはオーストラリアの「スポーツ立国運動」だった。

1976年モントリオール五輪で、金メダルがゼロ（銀1銅4）という惨憺たる結果に終わった

オーストラリアは、2000年のシドニー五輪招致活動を視野に入れ、国立スポーツ研究所を設立。エリート・スポーツマンの育成に力を入れると同時に、青少年や一般国民のスポーツ人口の増加に着手した。

その際、国民への広報活動や国の予算獲得等の根拠になったのが、「定期的にスポーツ（身体運動）を行う人が10％増加すると、心臓疾患と腰痛の患者が、それぞれ5％減少する」という国立スポーツ研究所の提示したデータだった。そしてスポーツ人口が40％増える（心臓疾患と腰痛患者が20％減少する）場合、保健費や医療費の節約、労働力の増加等で、約23億豪ドル（現在のレートで約2000億円）の「利益」が生じると試算し、オーストラリアは全国にスポーツクラブを設立。スポーツの裾野を広げ、スポーツ人口を増やすと同時に、五輪選手などのエリート選手を育て、スポーツの頂点を高く築くという「スポーツ立国（スポーツによる国づくり）」を実践した。

東京・銀座をパレードするロンドン五輪のメダリストたち（毎日新聞社提供）

国民の心をつなぐスポーツ

イギリスもロンドン五輪を通じて、そのような国づくりを目指したが、さらに近年急増している移民者たちの暮らす地域に、オリンピックの諸施設を集中させ、新たに英国籍を取得した移民と、古くからの英国人との間の境界を取り除くことでも、スポーツを大いに利用した。つまり、同じスポーツを見たり、応援したり、実際に行ったりするなかで、移民と英国人の間に横たわる人種、民族、宗教等の違いから生じる垣根が取り払われるよう期待したのだ。

それがどの程度功を奏したか、判定するのは困難だが、ロンドンでのオリンピックやパラリンピックでは、多くの移民選手が活躍。開閉会式でのイベントでもアフリカ系アジア系の人々が大勢登場し、観客席でも同様の光景が見られた。そのことを考えると、移民の多様化で一国家一民族ではなくなった現代社会において、スポーツは国民の心を一つにつなぐツールとして、一定の役割を果たしたといえそうだ。

そういったスポーツの果たす社会的役割は、かつてスポーツが国威発揚という政治的役割に利用されたこと（たとえば1936年のベルリン五輪でヒトラーの支配するナチスがオリンピックを政治的に利用し、国家宣伝に用いたことなど）とは、まったく正反対の新しいスポーツの社会的役割、ということができるだろう。

小さくないスポーツの市場規模

もちろん最近でも、スポーツ（オリンピック）が国家の国威発揚のために政治利用されるケースはある。が、それ以上に現代社会のスポーツは、経済的な役割が大きくなった。

夏冬の両オリンピックはもちろん、サッカーのワールドカップ、テニスの四大大会（全英、全仏、全米、全豪オープン）、ゴルフの四大大会（マスターズ、全米プロ、全米・全英オープン）……など、スポーツの世界的ビッグイベントは、巨額のマネーを動かし、国際経済にも影響を及ぼしている。

ヨーロッパ・サッカーやアメリカの四大スポーツ（メジャーリーグ・ベースボール＝MLB、アメリカン・フットボール＝NFL、バスケットボール＝NBA、アイスホッケー＝NHL）など、欧米のスポーツはそれぞれ大きな市場規模を誇っており、アメリカのGDSP（グロス・ドメスティック・スポーツ・プロダクツ）は（1995年のデータで）約1520億ドル（約13兆円）。これはアメリカ国内産業別ランキングでは、電器産業（1385ドル＝13位）や自動車産業（887億ドル＝20位）を上回る11位にランクされるという。

ヨーロッパのスポーツ産業は、アメリカの約半分の規模と言われ、日本はスポーツ産業の統計が存在しない（スポーツ・ウェアは衣類産業、スポーツ観戦の入場料等は娯楽産業等に分類されている）ので詳しい数字はわからないが、おおよそ5～10兆円規模のスポーツ市場があるとされている。日本の自動車産業の市場が約15兆円だから、それはけっして小さな規模ではない。

Top25 U.S. Industry Ranking
（1995 Industry GDP ; billion of $）

Rank	Industry	Size
1.	Real Estate	850.0
2.	Retail trade	639.9
3.	Wholesale trade	491.0
4.	Health services	443.4
5.	Construction	277.6
6.	Business services	275.3
7.	Depository institutions	223.9
8.	Utilities	205.3
9.	Other services	194.9
10.	Telephone and telegraph communication	155.7
11.	Sports	152.0
12.	Chemicals and allied products	141.0
13.	Electronic and electrical equipment	138.5
14.	Industrial machinery and equipment	123.3
15.	Insurance carriers	115.4
16.	Food and Kindred products	113.3
17.	Trucking and warehousing	100.6
18.	Legal services	100.5
19.	Printing and publishing	89.7
20.	Motor vehicles and equipment	88.7

（出所）Sports Marketing Quarterly Volume6・Number4

教育テーマに寄与するスポーツ

このように現代社会におけるスポーツは、社会的にも、政治的にも、経済的にも、けっして小さくない役割を担っているのだ。が、さらに忘れてならないことが二つある。

一つは国際オリンピック委員会（IOC）がスポーツの体育（フィジカル・エジュケーション）とし

ての教育的価値に着目し、14歳から18歳のスポーツ選手を対象に第1回ユース・オリンピックを2010年シンガポールで開催したことだ。冬の大会も翌々年インスブルック大会から始まり、スポーツを通じた青少年教育を目的とするスポーツ教育プログラムを取り入れた大会として、夏冬ともに4年に1度開催されることになった。

日本では明治時代に欧米から伝播したスポーツは、主に学校教育のなかの体育として発展してきた歴史がある。それなのにユース五輪がメディア等で注目されないのは、学校体育の現場にいまだに体罰が存在することと並んで、残念と言うほかない。学校でのスポーツ教育は、体力の向上や学校対抗の部活動だけでなく、イジメ問題の解消や引きこもりの防止等、多くの新たな教育テーマにも活用できるはずだ。

「人類の未来」とスポーツ

そして最後に取りあげるのは、現代のスポーツが「人類の未来」に対する「考察」を行っているという事実である。いったい未来の社会には、どんな人類が登場するのだろう？

たとえば市川崑監督の残した記録映画『東京オリンピック』を見てほしい。このスポーツ映画の名作には素晴らしい見所が数多くある。が、スポーツマンの身体だけに注目して見ると、約半世紀のうちに人類の身体がかなり大きく変化したことに気付く。

長距離走者のように、さほど今日と変わらない身体もあるが、総じて現在のスポーツマンは男子も女子も筋骨隆々となり、半世紀前のオリンピック選手は、まったく普通の人（スポーツをやってない人）に見える。

トレーニング方法の開発と進歩、サプリメントなど高栄養の食事の摂取、それにドーピング（？）……によって、約50年を経て人類の身体は大きく変化したのだ。

さらに南アフリカのピストリウス選手のように、両脚義足でオリンピックの（健常者の）陸上球技に出場する選手も現れた。しかもパラリンピックでは、ピストリウス選手に勝つ選手まで現れた。そんなパラリンピックの選手が、もしも世界記録を出したら、それは人類の記録として公認されるべきか……？

また臓器移植者スポーツ大会（心臓や腎臓の内臓臓器の移植手術を行った人の大会）では、既に100mを10秒台で走る人が出現している。それは通常のスポーツ大会ではドーピングとして使用が禁止されているステロイド系の薬（筋肉増強剤）が、臓器移植者には移植した臓器に対する拒否反応を抑える必需薬として許可されているから、ともいわれている。もちろん臓器移植手術をした人に、ドーピングだからといって必需薬を禁止することはできない。ならば、その人が、将来世界記録を出せばその記録は……？

それは考えてみれば、メガネをかけた選手が射撃やアーチェリーに出場するのは反則か……という問題と同じだ（現行ルールでは、もちろん反則ではない）。ならば未来の人類は、どんな改造人間（サイボーグ）もしくは人造人間（アンドロイド）になるのか……。

現代社会におけるスポーツは、社会的にも、政治的にも、経済的にも、教育的にも……そして哲学的にも、倫理的にも、人類の未来にまで、多くの影響を及ぼし、問題提起をしてくれているのだ。それほど価値のあるスポーツを、我々がどこまで活用できるか……。それには、我々は、もっともっとスポーツに対する理解を深める必要がありそうだ。

CEL